
老人と若者

夕月日暮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老人と若者

【著者名】

NZコード

N9119C

【登場人物】

夕月日暮

【あらすじ】

ある村の村長と、その孫の若者、そして村人たちの話。

それは、いつかどこかであつた話。

あるところに、小さな村があつた。村人たちとは時々喧嘩をしたりしながらも、平和に暮らしていた。

村をまとめているのは村長一家だつた。今の村長は何事にも公平な態度で臨んだので、村人たちの間で起きた揉め事はすぐに対処した。また、間違つたことは許さないとする姿勢でいたから、村人は規則正しい生活をするようになつた。

「これは見事な村じや。そなたは本当に良い村長じやの」

近くの領主も、この村に好感を抱いてくれた。

「それ、何か褒美をくれてやろう。何か望みはないかの」

領主の言葉に、村長はこう答えた。

「恐れながら、私にそのようなものは無用でござります」

「なぜ、じや。何もいらぬと申すか

「はい。何もいりませぬ」

村長の頑なな態度に、領主はがっかりした。褒美を渡せば、借りを作れると思っていたからである。村長も、それを見越して断つたのだった。

その後も何度も領主はやつて來たが、結局村長は一度も褒美を受け取らなかつた。

村長のあまりの頑固さに、領主も腹を立てるようになつて來た。

そこで彼は、村人たちにこう言い触らした。

「あの村長は私が褒美をやろうと言うのに受け取ろうとしない。だから私は、その褒美を君たちに『えてはどうか』と言つた。しかし彼はそれも断つたのだ」

これを聞いた村人たちは怒つた。

「あの村長はケチだ。なんで俺たちに褒美をくれない

「自分は金持ちだからいいんだろうが、少しあはそんなに金もないんだぞ」

また、ある年、村長は毎年恒例の祭りを中止にしてしまった。これを楽しみにしていた村人たちは余計に怒った。一部の者たちは村長の家に乗り込んで直訴した。

「村長、なぜ祭りを中止にするんだ」

それに村長はこう答えた。

「今年は犠牲に捧げる牛がない」

「いるだろう、二頭も」

その二頭は村長の牛だった。それを差し出さないのはなぜだ、と村人たちは問いかける。

「あの二頭は子牛を産ませるために残しておく。そうしなければ牛の数は減るばかり。新しいのを買う金もないのだ」

「ならば領主様から褒美として、金か牛をもらえばいいだろ？」

「それは出来ん」

村人たちは諦めて、それぞれ家に戻った。しかし村長の言い分に納得したわけではない。村長はケチだ、と囁く声が少しづつ増えていった。

その噂は村長一家の元にも聞こえてきた。村長の娘は父に詰め寄つて、こう叫んだ。

「村人たちの信用をなくしてまで、見栄を張りたいのですか」

これに村長はこう答えた。

「見栄ではない。お前たちには分からぬだろうが、これは必要なことなのだ」

「では、父さんには分かりますか。私たちが、貴方のせいにどれだけ白い目で見られているかを」

村長の娘は、村人たちの間では贅沢な女だと噂されていた。村長の孫は、友達からも相手にされなくなっている。

家庭の不和は徐々に深刻なものになつていった。食事の度に村長と娘は言い争い、孫は黙つてそんな二人を見続けている。

そしてある日、とうとう村長は嫌気がさしたのか、家から出て行つてしまつた。村から離れたところにある森の中に、隠居してしまつたのである。

村長がいなくなつたことで村人たちは喜び合つた。村長の家族も、領主までもが喜んだ。村長がいなくなつたことで悲しんだ者は、一人もいなかつた。

「では新しい村長を決めよう」

村人たちは、村長の孫を新しい村長に指名した。二十歳も過ぎていたこの若者は、喜んでそれを引き受けた。

これで嫌われ者の境遇を抜け出せる。そう思つた若者ははりきつていた。

まず、領主からの祝いを受け取つた。大量のお金と、数十頭の牛や豚。それに大量の小麦が送られてきた。

もちろん、若者はこれらをすべて村人に分け与えた。

「新しい村長は気前がいいぞ」

「ケチな前の村長とは大違いだ」

若者の姿勢は皆から好評だつた。新しい村長は、皆から歓迎される形で生まれたのである。

それから、若者は毎年恒例の祭りを再開した。また、前の村長が決めていた規則も、次々と解いていつたのである。

「これからは一日、好きなだけ飯がえる」

「疲れたら、いつでも家に帰つて休んでいいんだつて」

「結婚や離婚は当人たちだけで決めていいそうだ」

こうした方針を掲げたことで、若者への支持は盤石のものになつた。間もなく若者は村一番の美しい娘と結婚し、子供にも恵まれるようになつた。

祭りでは村人たちの歓声が夜通し響き渡つた。村の中でため息をつく者は一人もいなくなり、皆の表情には笑顔が絶えず浮かぶようになった。

しかし、問題がないわけでもなかつた。

領主からの命令で、村人たちは戦争に駆り出されるようになつたのである。これは、前の村長のときにはないことだつた。

「村長、俺は戦には行きたくない」

そう言つ村人もいたが、若者は正直に事情を説明した。

「褒美を領主様からもらつたんだ。断ることは出来ないんだよ」

村人たちはやむなく従うことになつた。働き盛りの男たちは戦場に行くようになり、戻つてこない者も少なくなつた。また、戻つてきた者には別の問題が待ち構えていたのである。

「飯がない」

男たちの留守を預かっていた女たちは、農業と子育てという二つの仕事を任されていた。しかしそれを両立させるのは大変なことである。それに、何時から何時までは働くようにと前の村長が定めた規則も、今の村長が解いてしまつっていた。疲れたら家に帰る、という人がほとんどだったのである。

これを聞いた若者はすぐに食料を配給した。しかし蓄えはすぐに尽きてしまい、村は食糧危機に陥ることになつてしまつた。

また、夫婦仲が悪くなり、離婚する者たちが増えていつた。

男は女を怠け者と叱責するようになり、女は男を無責任だと非難するようになつた。以前は第三者の立ち会いがなければ離婚は出来なかつたのだが、これも今の村長によつて規則が解かれたので、当人たちだけで出来るようになつていた。おかげで村は離婚と結婚の繰り返し。誰と誰が家族なのか分からなくなつってきた。

「私の御父さんと御母さんは誰なの？」

そんな子供たちも増えていき、村は徐々に悲惨な状態になつていつた。

「これも、あの新しい村長のせいだ」

村人たちの怒りの矛先が若者に向けられた。これを知つた若者の妻は強引に離婚を成立させて、子供と一緒に出て行つてしまつた。

「貴方はなんてことをしてくれたのですか」

縁を切ることも出来ない母親は若者をひたすら非難した。

そこで若者は、盛大な祭りを開いて皆の怒りを鎮めようとした。そのためには資金が必要だつたが、それは領主から借りるつもりだった。

ところが、領主は若者を見るなり苦い顔つきになつた。

「お前の村は散々な評判だそうだな。そんな村を抱えているということで、今まで白い目で見られるようになつたのだぞ」

結局、お金を借りることは出来なかつた。若者は絶望して家に戻り、いつものように母の叱責を受け続けた。

それから程なくして、村人たちは村長宅に押し掛けた。とうとう不満が爆発したのである。

しかし、そこで彼らが見たものは、母と共に動かぬ人となつた若者の姿だつた。

夕食に毒を盛つたのか、二人はテーブルにつつ伏せになつたまま亡くなつていた。

若者の部屋から見つかつた遺書には、こう書かれていた。

「私のことは、祖父のいる森の中に葬つて欲しい。ここに埋められたのでは、騒々し過ぎて、安心して眠ることも出来ない」

それを見た村人たちは、前の村長が隠居している小屋へと向かつた。

小屋に老人はいなかつた。ただ、椅子に腰かけたままの骸骨があつただけである。

椅子の近くのテーブルには、一枚の紙切れがあつた。そこには、無骨な字でこう書いてあつた。

「これを見た者に頼みがある。わしを、あの心ない者たちの元に戻してくれ。ここにいては、あの馬鹿者どものことが気になつて、安心して眠ることも出来ない」

その後、地図上から村の名前は消えることになった。
老人と若者がどうなったのかは、どこにも伝わっていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119c/>

老人と若者

2010年10月8日15時05分発行